

ブラームス歌曲集

日本語訳

山崎裕視

1 エーオルスの琴に寄せて

この古い露台の
つたのからまる壁に立て掛けられた
おまえ 風から生まれた美の神の
神妙な琴よ
始めよ
また始めるのだ
その妙なる哀歌を

風よ おまえたちは遠くからやって来る
ああ 私が愛していたあの子の
若々しい緑の茂る
墓の方から
そして春の花に触れつつ
芳しい香りをはらみ
この心を何と甘く悩ませることか
琴の糸を鳴らしに来ておくれ
高く響く悲しみをまとい
私の憧れの欲するままに吹きつけたり
また消えて行ったりしながら

だがひとたび
風がさらに激しく吹きつけたら
琴のやさしい叫びは再び
私を快く驚かせながら
時ならず私の心を揺り動かす
そしてここで — 咲きほこるバラは震え
私の足元に花びらをすべて散らす

2 私の歌

私の心が響きはじめ
その音に翼が広がりはやくと
また目の前に浮かんでくるのは
忘れ得ぬ色褪せた喜び
そして糸杉の陰のように
私の歌は暗く響く

3 森をめぐらす丘辺から

森をめぐらす丘辺から
愛にうるむ熱いまなざしを
私は投げかける
あなたを緑に包む野辺の方へと

私は泉に眼差しを落とす
ああ 水とともに
おお恋人よ あなたのものとへ
帰ることができたなら

私は雲の流れに
眼差しを向ける
おお恋人よ あなたのものとへ
飛んでいくことができたなら

私の幸せと苦しみであるあなたを
どんなにか魅惑したいことか
唇と眼差しと胸で
あなたの心と魂を

4 あなたが時折にも微笑むと

あなたがただ時折にも微笑むと
ただ時折この限りない熱情に
涼しさをあおぎかけてくれたら
私はじっと耐え忍び
この恋に苦しみを与えるものも
君のなすままにさせてみよう

5 私は夢を見た

私は君に愛されている夢を見た
だが目覚めたいとは思わなかった
なぜなら夢の中でもう感じていたから
それが夢であることを

6 風もない穏やかな大気

風もない穏やかな大気
自然の深い安らぎ
静かな庭辺の夜には
ただ噴水の音だけがする

けれど私の思いのうちには
なお熱い欲求がふくらみ
血管には生命がたぎり
生命を求める

君の胸もさらに焦がれる願いを
膨らませぬはずはなく
わたしの心の呼びかけが
君の心を深く揺さぶらぬはずはない

静かに軽やかな足取りで
ためらわず飛んで来てほしい
やっておいで
この上ない満足を分かちあえるように

7 僕らはあてもなく歩いた

僕らはあてもなく歩いた
僕も君も黙っていた
君があの時考えていたことを知れば
僕も語ることが沢山あるのに
僕が考えていたことは言わないでおこう
ただ一つのことを言うとすれば…
僕が考えていたことはすべて美しく
すべて素晴らしく楽しいことだった
僕の頭の中で思いは
金の鈴のように鳴り
この世のどんな響きも
これほど甘く美しくはないのだ

8 セレナーデ

月が山の上に昇ると
恋人たちには格好だ
庭に泉がさらさら流れるほかは
あたりは静まり返っている

城壁に沿った物陰に
三人の学生が立ち
フルートやヴァイオリンやツイターを持ち
歌い奏でている

その響きは美しい娘の
夢の中にそっと忍びこんでいく
彼女は金髪の恋人を見て
「忘れないで」とささやくのだ

9 わが恋は緑

わが恋はリラの茂みのように緑をなし
わが恋は太陽のように美しい
太陽はリラの茂みに輝きかけて
香りと喜びをもって満たす

わが魂は小夜啼鳥の翼をもち
花咲くリラの木に揺れる
香りに心うばわれ 声高く
恋に酔う調べを歌う

10 野を越えて

野を越えて私の足音は響き
大地からも連れ立つ音はくぐもって響く
秋が来て 春は遠くに去った
一度は幸せな時があったのだろうか

立ち昇る霧は霊気のように漂い
草は黒く 空は寂しい
五月にここを通らねばよかった
人生と愛 何と早くも過ぎて行った事か

11 おお 涼しい森よ

おお 私の恋人が歩む涼しい森よ
お前は何処でざわめいているのか
おお 私の歌を分かってくれるこだまよ
お前は何処で耳を澄ませているのか

私の恋人が歩む森は
心の奥深くでざわめいている
こだまは悲しみの中で眠り
歌は消えてしまった

12 五月の夜

白銀の月が
茂みを洩れてきらめき
まどろむ光を
芝草の上に散らし
小夜啼鳥が鳴く時
私は悲しく藪から藪をさまよう

木の葉に隠れ
鳩のつがいは陶酔の声を
鳴きかけてくるが
私は背を向け
なおも暗い陰を求める
すると孤独の涙があふれてくる

私の心に輝いている
朝焼けのような
ほほえむ面影よ
いつ私はこの世で君に会えるだろう
すると孤独の涙はなお熱く
頬をふるえてつたい落ちる

13 雨の歌

雨よ たぎり落ちて
またあの昔を呼び覚ませ
砂地に雨水が泡を立てていた
幼い日に見た夢を

もの倦い夏の暑さが
爽やかな冷気と競い合い
つややかな木の葉が露に濡れ
畑が緑色濃くなった時

何という楽しさ
裸足で小川の中に立ったり
草に触ったり
両手で泡をすくったことは

また火照った頬に
冷たいしずくを受けたり
新しく目覚めた香りに
幼い胸をふくらませたことは

濡れた花の萼のように
心は息づき開いていき
香りに酔った花のように
天の露に浸っていた

どのしずくも震えるほど
胸のときめきまで深く冷やし
想像の聖なる営みが
秘められた命の中まで沁みいった

雨よ たぎり落ちて
私の昔の歌を呼び覚ませ
戸外では雨音がしていた時
私達が家の中でうたった歌を

また再び耳を澄ませてみたい
あの快いしっとりとした音に
私の心を静かに潤してみたい
あどけない子どものおののきで

14 君の青い瞳

君の青い瞳はじっと静かで
私はその奥まで見入ってしまう
何を见たいのか と君は訊ねる
健やかな自分をだよ

私を焦がれさせた燃える眼差し
名残りに今も胸は痛む
君の瞳は湖のように澄みきって
また湖のように冷たくもある

15 私の傷ついた心は

私の傷ついた心は穏やかな安らぎを求める
おお 安らぎを吹きこんでおくれ
心は泣きながら 心細げに羽ばたき君のもとに飛ぶ
おお君よ 包み込んでほしい

垂れこめた雲間から光がさすように
君は私の心に合図する
おお 君の柔らかな光でずっと微笑みかけておくれ
私の道標 星である君よ

16 余韻

雨のしずくは木の間から
青草にしたたり
暗い眼から落ちる涙は
私の頬を濡らす

日がまた照れば
芝草は緑を増し
私の頬にもいや増して
熱い涙はきらめくだろう

「四つの厳粛な歌」

17 I

人も獣のように生きていく
獣が死ぬように人も死ぬ
すべてのものは同様に息をする
そして人は獣にまさってはない
一切は空であるからだ
すべてのものは一つの所に行く
すべては塵から生まれ
また塵に帰っていく
人の魂が上へと昇り
獣の命が地の下に降りていくことなど
誰が知り得ようか
それゆえに私は思う
人はその仕事の中で楽しむにしかずと
それが人の分であるからだ
死後に何かあるかを見るために
誰が人をあの世に送ろうとしようか

18 II

私は振り返って見た
この世で不当に苦しむすべての人を
不当に悩み 慰める者もない人々の
涙を見るがよい
彼らに不当を為した者の力が強すぎて
彼らは慰め手を得なかった
そこで私は 既に世を去った死者を
まだこの世にある生きる者よりも讃えた
そしてまだ生まれていない者
またこの世に行われる悪を知らぬ者は
両者よりも良いのだ

19 III

おお 死よ その何という苦しさ
楽しい日々を過ごし 満ち足り
苦も知らず すべてうまく行き
さらに旨いものを食べたいと思う者が
そのことを考える時
おお 死よ その何という苦しさ

おお 死よ 何と善きことを為す
力萎え 年若い
すべての苦を忍び
死より他に良いものを望んでも
得ることのできぬ貧者にとっては
おお 死よ 何と善きことを為す

20 IV

もし私が人や天使の言葉で話しても
愛をもたねば
私は高鳴る銅鐘か
響く鈴に過ぎない
もし私に予言ができて
あらゆる秘密とあらゆる知識に通じ
山をも動かすほどの
堅い信仰を抱いていても
愛をもたねば
私は無きに等しい
さらにもし私が全財産を貧しい人に与えても
また自分の体を焼かせてさえも
愛をもたねば
何も私のためにはならぬだろう

私たちは今 不分明な言葉の鏡を通して見ている
やがてはしかし顔と顔を合わせてみる
今は私が部分を知るだけだが
やがては知るだろう
私が良く知られているように
さても残るのは信仰を希望と愛の三つだが
愛こそはこの中で最も大きなものだ

